

カツオ インド洋

Skipjack, *Katsuwonus pelamis*



管理・関係機関

インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

最近一年間の動き

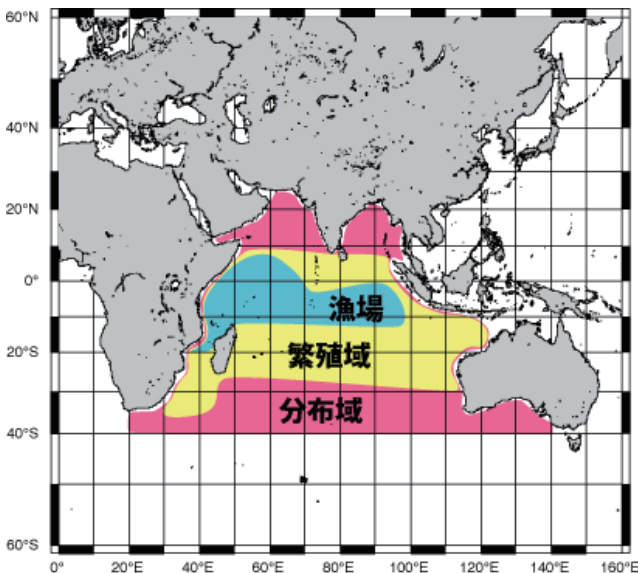
2006 年の総漁獲量は 59.6 万トンとなり、過去最高を記録した。2007 年の IOTC 科学者委員会では資源状態の認識に変化が無く、資源的に問題があるとは考えられていない。

生物学的特性

- 寿命：6 歳以上
- 成熟開始年齢：1~2 歳
- 産卵期・産卵場：周年、表面水温 24°C 以上の海域
- 索餌期・索餌場：周年、熱帯~温帯域
- 食性：魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海獣、海鳥類等

利用・用途

缶詰、かつお節、乾燥品などの加工品原料



インド洋におけるカツオ分布、繁殖域、および漁場

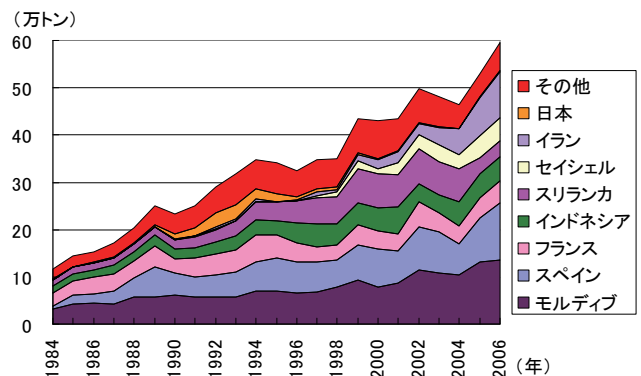
漁業の特徴

漁獲の約 4 割はスペイン・フランス・セイシェル等のまき網、約 3 割はインドネシア・イラン・スリランカ等の流し網、約 2 割はモルディブ等の竿釣りによる。まき網の漁獲増は FADs 利用の影響が大きく、現在はまき網による漁獲の 80% が FADs 操業による。日本は 1989~2001 年までまき

網の民間船が操業し、1992~1993 年の漁獲は 3 万トンを超えたが、現在は水産総合研究センターの試験操業のみである。

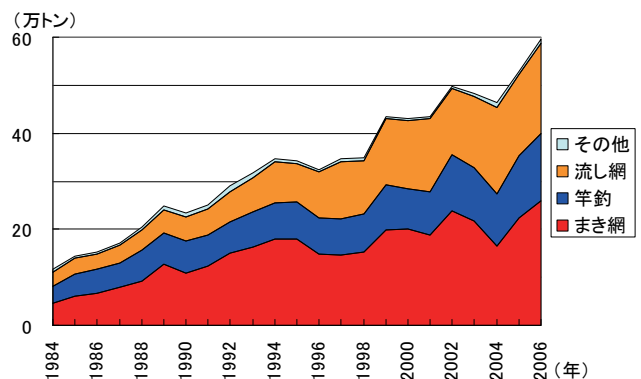
漁業資源の動向

漁獲量は 1950~1982 年は最大 6 万トン程度だったが、西インド洋でまき網漁業が本格化した 1983 年に 10 万トンを超え、1992 年には 30 万トン、1994 年には 40 万トン、2000 年には 50 万トンを超えた。その後もほぼ 50 万トンを超える漁獲が続いている。



インド洋におけるカツオの国別漁獲量 (1984~2006 年)

(データ：Anon. 2007. 2006 年は暫定値)

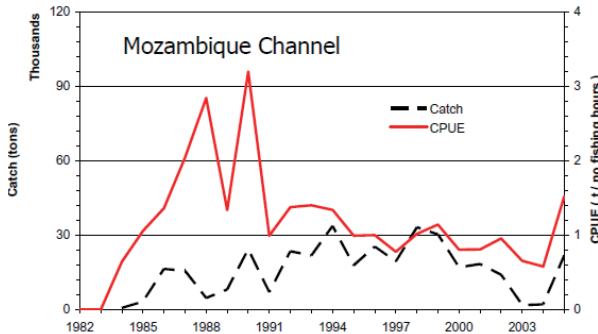
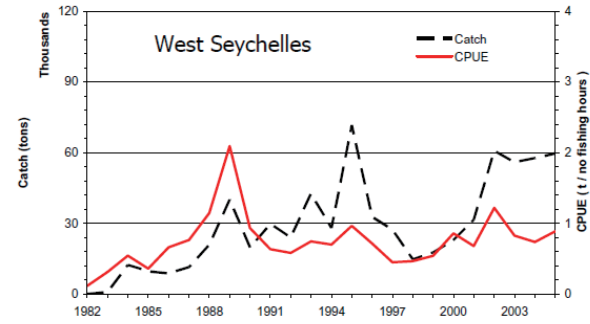
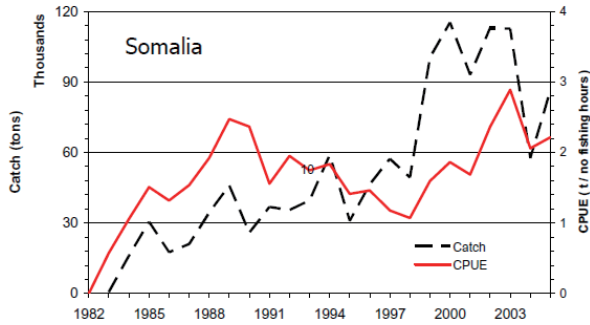


インド洋における漁法別カツオ漁獲量 (1984~2006 年)

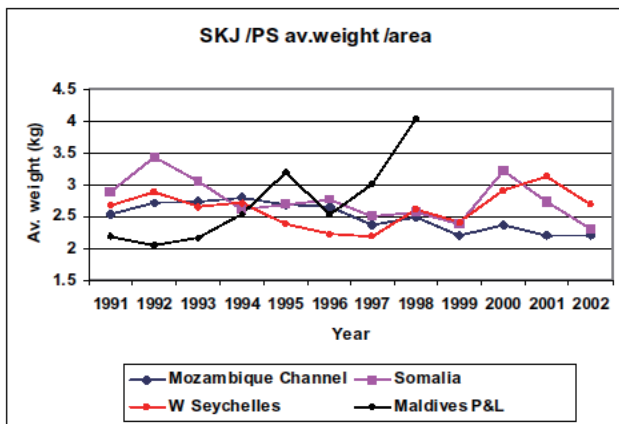
(データ：Anon. 2007. 2006 年は暫定値)

資源状態

最近のまき網漁獲物サイズは、モザンビーク海峡でやや小型化した。全体では大きな変化はない。まき網の CPUE は、近年においては少なくとも減少傾向にあるとはいえないと推察される。また、モルディブの竿釣りの CPUE も、近年増加傾向にある。これら漁獲物サイズ・CPUE の経年変化と漁獲量の推移を見る限り、資源に問題があるとは判定できない。



まき網の海域別漁獲量と CPUE (上：ソマリア沖、中：セイシエル西部沖、下：モザンビーク海峡、1983～2006 年。データ：Anon. 2007。2006 年は暫定値)



まき網 (モザンビーク海峡 (青)、ソマリア (ピンク)、セイシエル西部沖 (オレンジ)) とモルディブの竿釣り (黒) で漁獲されたカツオの平均体重の経年変化 (Anon. 2003)

管理方策

資源に特に問題がなく、管理策をすぐに考える必要はない。しかし、FADs 利用等の操業方法の変化で、狭い範囲に漁獲の集中が進めば、東部大西洋で可能性が指摘されているような漁獲物の小型化や漁獲の減少が伴う地域的な乱獲も起こりうるため、予防的な監視が必要である。また、2003 年 IOTC 年次会議で初めて本海域に保存管理措置として導入された全長 24 m 以上の漁船の総隻数等の制限等が、本資源の量に影響を与える可能性がある。

資源評価まとめ

- 資源評価は IOTC により実施
- CPUE は一部漁業を除き増加傾向、漁獲物平均体重には経年変化が見られず、漁獲量は増加傾向
- 資源的に問題があると判定できない

資源管理方策まとめ

- 資源管理策は勧告されていない
- 狭い範囲への漁獲の集中による地域的乱獲の可能性の監視が必要
- 大規模まき網漁業と伝統漁業の競合も問題視
- 2003 年 IOTC 年次会議で全長 24 m 以上の漁船の総隻数等を制限

カツオ(インド洋)の資源の現況 (要約表)

資源水準	高位
資源動向	増加
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	46.5～59.6 万トン 平均：51.4 万トン
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	1.5～3.2 千トン 平均：2.2 千トン